

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第5号 畑作物

発行日 平成24年 7月26日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 大豆 早いところでは開花期を迎えています。ほ場をよく観察し、適正な病害虫、雑草防除を行いましょう。
- ◆ 小麦 次年度の作付けに向け、早めに圃場準備を進めましよう。

大豆

1 雑草対策

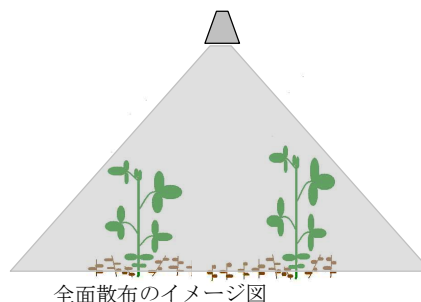
大豆の生育期に使用できる薬剤は、全面散布できる茎葉処理剤と、吊り下げノズルを使用して散布する畦間処理剤、畦間・株間処理剤があります。雑草の種類や大きさを確認して効果的に使用ましよう。また、畑雑草の種子の寿命は長く、水田に戻しても死滅しないものがほとんどです。手取り除草は種子をつける前に行いましよう。

《大豆生育期の広葉雑草を対象とした散布方法の注意点及び除草剤の特徴》

1 全面散布

大豆バサグラン液剤

- (1) 選択性除草剤であり、作物の上から散布できる。
- (2) 散布器具として既存の器具が利用可能である。
- (3) イネ科雑草には効果がない。
- (4) シロザ・ツユクサ・イヌビユ・エノキグサ等に対する効果が不安定である(ただし、シロザ、イヌビユは、畦間処理(高濃度)では効果が高い)。
- (5) 散布後に発生する雑草に対しては効果がない。
- (6) 葉害を生じさせやすい薬剤なので、使用にあたっては指導機関の指導を受け、十分に効果・葉害を理解して使用すること。

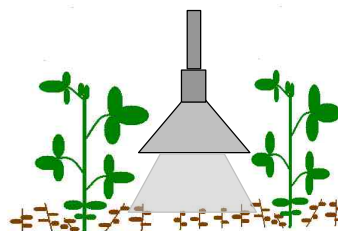


全面散布のイメージ図

2 畦間処理

ラウンドアップマックスロード、タッチダウンiQ、大豆バサグラン液剤(高濃度)

- (1) 非選択性除草剤であり、作物に飛散させないよう十分に注意する。
- (2) 株間には絶対に散布しない。
- (3) 散布器具として吊り下げの専用ノズルが必要であり、飛散防止用カバーを用いて散布することが望ましい。
- (4) 大豆バサグラン液剤で効果の低い草種が優先する圃場でも高い効果が得られる。
- (5) 散布後に発生する雑草に対しては効果がない。

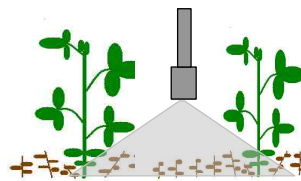


畦間処理のイメージ図

3 畦間・株間処理

ロロックス(水和剤)、バスタ液剤

- (1) 非選択性除草剤であり、本葉に飛散させないよう十分に注意する。
- (2) 散布器具として吊り下げの専用ノズルが必要である。
- (3) 畦間及び株間の雑草に対して効果が期待できる。
- (4) ロロックス(水和剤)は、シロザ等に対する効果が不安定で、イネ科雑草には効果がない。また、雑草茎葉兼土壌処理であることから、散布後に発生する雑草に対しても抑草効果が見込まれる。
- (5) バスタ液剤は、散布後に発生する雑草に対しては効果がない。



畦間・株間処理のイメージ図

2 病虫害防除

(1) ウコンノメイガ

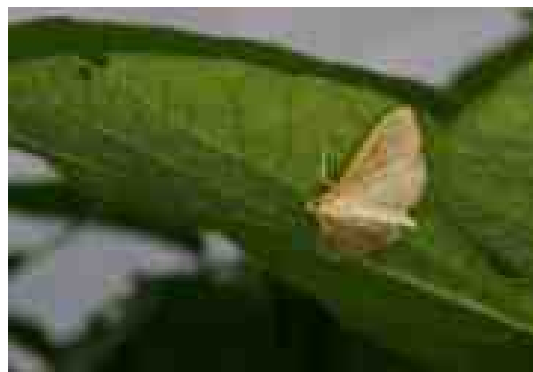
ウコンノメイガの成虫は葉の裏に産卵し、かえった幼虫が葉を巻いて食害します。圃場をよく観察し、多発の徴候がみられたら、すぐに防除を行いましょう。また、ウコンノメイガは、葉色の濃い品種や生育が旺盛な圃場で多発する傾向がありますので、重点的に観察しましょう。

○防除の目安

防除時期は7月下旬～8月上旬で、7月第6半旬に一株あたりの葉巻が6個以上見られる場合に防除が必要です。



若齢幼虫による食害（葉巻）



「ウコンノメイガ」成虫



「ウコンノメイガ」幼虫



被害の状況

(2) マメシクイガ

8～9月に羽化した成虫が粒の肥大が始まった大豆の莢に1粒ずつ産卵し、ふ化した幼虫が子実を食害して、収量・品質を低下させます。産卵盛期から幼虫ふ化期に薬剤による防除を行いましょう。

マメシクイガは、連作で密度が高まり被害が多くなる傾向があります。なおマメシクイガと紫斑病は同時防除が可能です。

○防除適期（産卵最盛期）

県中北部：8月第6半旬、県南平坦部：9月第1半旬

※ただし、ピレスロイド系薬剤を使用する場合は、上記より1半旬早め（県中北部：8月第5半旬、県南平坦部：8月第6半旬）に散布する。

(3) 紫斑病

8月下旬以降で気温が20℃付近にあり、降雨が続いた場合に感染します。若莢期～子実肥大期に薬剤による防除を行いましょう。薬剤が莢によく付着するように散布しましょう。なおマメシクイガと紫斑病は同時防除が可能です。

○防除適期

1回防除の場合：開花期から30日後頃

2回防除の場合：開花期から20～40日後頃に2回散布（散布間隔は10日程度）

○使用上の注意点

- ・2回散布の場合、耐性菌の発生を防ぐため、1回目に用いる薬剤と2回目に用いる薬剤は同一薬剤や同系薬剤を避ける。
- ・ストロビルリン系薬剤は耐性菌の発生リスクが高いため、2～3年に1回の使用にとどめましょう。



紫斑粒



紫斑病罹病株

小麦

1 小麦栽培を意識した水稲管理

水稲を収穫した後に小麦の播種を行う場合には、小麦の栽培を意識した水稲の管理が必要です。水稲の収穫が遅れれば、排水対策や小麦の播種も遅れてしまいます。

○小麦作付予定の水稲の管理

- ・水稲の出穂開花期は大量に水を必要とするので、田面が露出しないよう湛水管理（浅水でOK）とする。
- ・開花後の水管理は田面が湿っている程度とし、湛水状態にする必要はない。
- ・水稲は適期収穫を行い、収穫後はすぐに溝掘り（額縁明渠）等排水対策を実施する。

2 連作圃場での排水対策

連作圃場では排水路などの点検・補修や土づくりを行って適期播種に向け対策を万全にしておきましょう。また、明渠が排水口につながっているか確認しましょう。

3 土壌改良

収量アップ、品質向上のために土づくりは必須です。特に連作圃場ではここ数年地力の低下が目立っています。他の作目を取り入れて、良い輪作サイクルができれば申し分ないのですが、できない場合は堆肥投入や緑肥を利用し積極的に土づくりを行う必要があります。

また、石灰・苦土が減少し、酸性化が進んでいる圃場も目立ちます。毎作、土壌改良資材を施用できなくても、水田作での堆肥の秋施用や粗砕炭カルの一回施用など、数年間のローテーションの中で、土壌改良に取り組みましょう。

次号は8月30日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 屋内では遮光や断熱材の施工等により、作業施設内の温度が著しく上がらないようにするとともに、風通しをよくし、室内の換気に努めること。作業施設内に熱源がある場合には、熱源と作業者との間隔を空けるか断熱材で隔離し、加熱された空気は屋外に排気すること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

中央農業改良普及センター県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。